

## 医薬系キャンパスにおける学生支援の現状と課題 －安全配慮義務との関連から－

酒井 渉<sup>1・2・6</sup>・松井祥子<sup>1・2・3</sup>・富山大学医薬系学務グループ・高倉一恵<sup>1</sup>・立瀬剛志<sup>3・4</sup>・吉永崇史<sup>4・5</sup>・  
水野 薫<sup>5</sup>・原澤さゆみ<sup>5</sup>・瀬尾友徳<sup>2・3</sup>・日下部貴史<sup>5</sup>・島木貴久子<sup>1</sup>・佐野隆子<sup>1</sup>・四間丁千枝<sup>7</sup>・  
島田尚佳<sup>7</sup>・宮村健壮<sup>8</sup>・舟田 久<sup>3・7</sup>・廣川慎一郎<sup>3・4</sup>・宮脇利男<sup>2・3</sup>・北島 勲<sup>1・3</sup>

- 1) 富山大学保健管理センター杉谷支所
- 2) 富山大学自殺防止対策室
- 3) 富山大学医学部
- 4) 富山大学保健医療人教育室
- 5) 富山大学学生支援センター
- 6) 富山大学杉谷キャンパス学生支援担当者連絡会
- 7) 前富山大学保健管理センター杉谷支所
- 8) 前富山大学医薬系学務グループ

The Report about Present Condition and Plan of Student Support Services on Medical and  
Pharmaceutical Campus in Relation with the Obligation of Caring for Student's Safety by University .

Wataru Sakai, Shoko Matsui, Educational Affairs Group(Sugitani Campus), Kazue Takakura,  
Takashi Tatsuse, Takashi Yoshinaga, Kaoru Mizuno, Sayumi Harasawa, Tomonori Seo,  
Takashi Kusakabe, Kikuko Shimaki, Takako Sano, Chie Shikencho, Hisaka Shimada, Kenso Miyamura,  
Hisashi Funada, Shinichiro Hirokawa, Toshio Miyawaki, Isao Kitajima

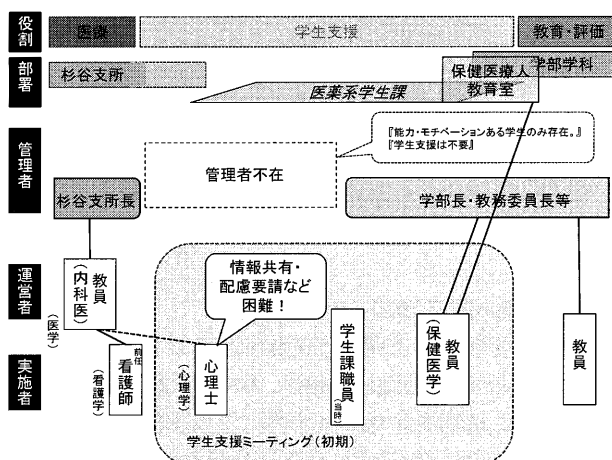
キーワード：冗長性モデル、学生支援担当者連絡会、安全配慮義務

### 1. 背景

富山大学杉谷（医薬系）キャンパスは、医療系  
2学部4学科のみからなる。従来、暗黙理に、医  
師・医療職を目指すに十分な能力とモチベーシ  
ョンをもった学生のみが在籍し、学生支援は必要  
ないものと理解されてきた（酒井・立瀬・吉永他、  
2012）。そのため、学生支援を担う部署や教員組  
織は存在していなかった（図1）。かつて学生支  
援は、医薬系学生課（現医薬系学務グループ）職  
員、保健医学教員など、その必要性をいち早く  
認識した一部の教職員によって個人的に行われて  
いた。

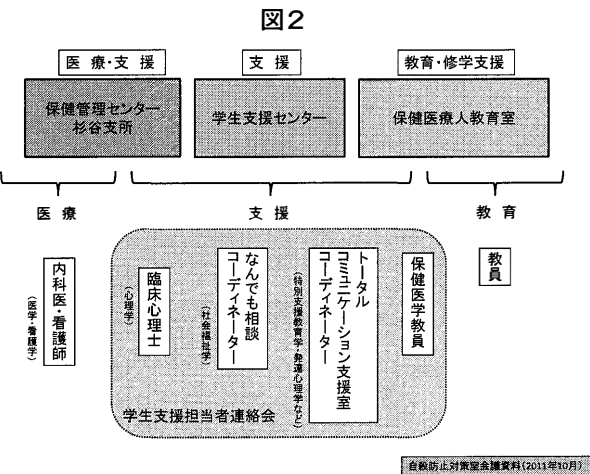
元来、学生支援は、大学教育の一環であり、教  
員および学務グループ職員等が行う業務の一部で

図1



ある。しかし各大学において、入学してくる学生の価値観が多様化する一方、未熟な学生も散見されるようになった。こうした状況下で、個々の教職員の経験則のみに拠る学生対応・学生指導では、困難が生じるばかりか、ハラスメントや人権侵害につながるとおそれがあると認識されはじめた（神谷，2011）。加えて、障害や疾病をかかえつつ修学を希望する学生への支援も必要とされた。

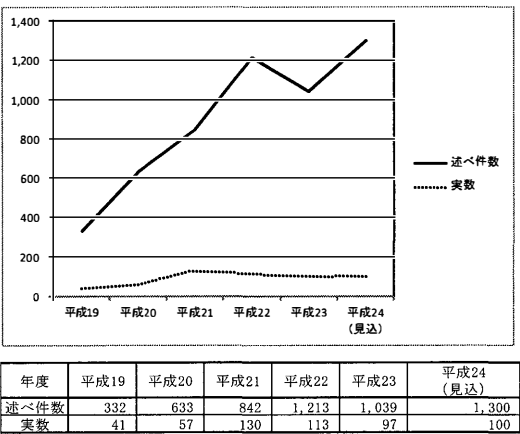
本学杉谷キャンパスもまた例外ではなく、保健管理センター杉谷支所看護師や、医薬系学生課（現医薬系学務グループ）職員などにより、徐々に学生支援の必要性が認識されるようになった。また、学生支援のみを専任的に行う職種の配置が求められた。そうした経緯から、2005年度より保健管理センター杉谷支所に常勤の臨床心理士が配置された。その後2007年度以降、学生支援GPなどによりトータルコミュニケーション支援室杉谷分室コーディネーター（専門は特別支援教育）や、なんでも相談コーディネーター（精神保健福祉士）などが、兼任・非常勤ながら学生支援センターに配置され、現在に至る（図2）。



2. 相談件数の増加

保健管理センター杉谷支所における心理相談件数は、年々増加傾向にあり（図3）、現体制（常勤1名、非常勤1名）で担当できる限界（鈴木，2006）に近づきつつある。このうち15%程度を、

図3



非常勤臨床心理士（月・金午後のみ勤務）が、多数の困難事例を含め担当している。非常勤臨床心理士雇用の予算の半分は学生支援センター自殺防止対策室より出ている（酒井，2012a；2011c）。

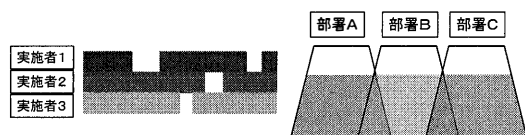
また、トータルコミュニケーション支援室杉谷分室およびなんでも相談窓口の相談件数も、いずれも急激な増加傾向にある。具体的な件数等については、各部署による報告を参照されたい。

3. 支援者の連携

各支援職は、学生との個別面接のほか、必要に応じ、学部学科の教員、医薬系学務グループ職員、保護者、学外医療機関などと連携・連絡を取りつつ、学生対応にあたってきている。

また2006年ごろより、「学生支援担当者連絡会」（旧称：学生支援ミーティング）（図1・図2・図8）において、杉谷キャンパスで実際に学生支援にかかわる複数職種が、複数の部署から参加し話し合いを行っている（図2・図8）。また、あえて複数部署間で業務範囲に重なりをもたせる「冗長性モデル（齋藤，2011）」（図4・図5）による理解と実践を行っている。「学生支援担当者連絡会」での話し合いと、「冗長性モデル」による理解・実践により、後述のような組織的不備を、当面は現場レベルでカバーし、スムーズな連携・役割分担をしながら学生対応を行ってきた（酒井・水野・原澤他，2012）。

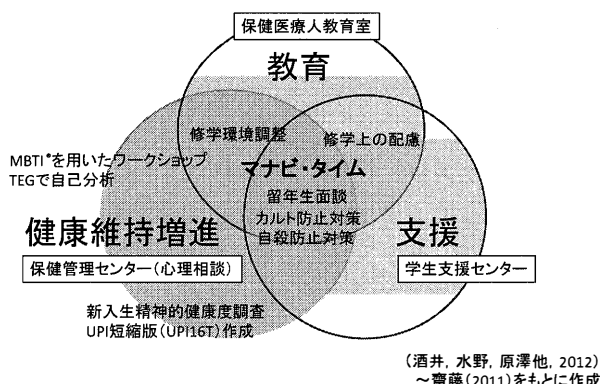
図4



- ・一時的な中断があっても当面実施し、後で回復できる。
- ・方法論が異なるので、完全に他職種の代替をすることはできない。

(酒井, 水野, 原澤他, 2012)  
～齋藤(2011)をもとに作成

図5



(酒井, 水野, 原澤他, 2012)  
～齋藤(2011)をもとに作成

#### 4. 理解を得る途上の困難

一方、下記のような事案において、キャンパス内理解を得ることが、しばしば困難であった(酒井, 2011a; 2011b; 2012a; 2012b; 2012c; 2012d; 2013)。

- ・主として、発達障害(傾向)もしくはパーソナリティ障害をもつ学生への支援において、「なぜ医療職としての就業が困難と思われる学生が、医薬系キャンパスに在籍しているのか。支援をしなければならないことが納得できない。」とする教職員が現れはじめた。
- ・不安障害や発達障害傾向をもつ学生は、しばしば新奇の場所を苦手とし、入学当初は道案内などの配慮を必要とする場合がある。しかしこのような、どの部署にも対応が想定されていない学生への対応において、部署間の押し付けや、学生のたらい回しが起こりがちであった。

- ・個々の教員が医師・看護師などの医療職であることから、「病気なら休んで治療。治ったら復学。」という理解になりがちで、難治性のうつ症状等をもつ学生への配慮要請などに困難を生じた。
- ・同様の理由で、「健康な人はなんでも相談、病気の人は保健管理センター。」といった理解がなされがちであったが、学生の必要性とは合致していなかった。
- ・不安感や一時的パニックなどにより、学生本人が状況や自分の要望をうまく説明できない場合がある。そうした際に、学生本人の同意のもと、支援職から教員等へ学生の意向を代弁することがあるが、それがしばしば越権とされた。
- ・内容を問わず「支援職より医師の意向が優先」という理解がなされ、学生の自殺防止(酒井, 2012d; 2013)や、カルト防止対策(酒井, 2012b)、発達障害学生への支援(酒井, 2011a)などに支障を生じた。
- ・自殺を含めた重大な結果を招くおそれのある学生についても、しばしば上記のような理由から、情報共有や具体的対応に支障がみられた。

総じて、杉谷キャンパスにおいては、学生の利益よりも、部署間の責任所在や、職種間の上下関係の観点が優先されがちであった。そのため、大学としての安全配慮義務の履行や、修学環境の保全に支障をきたしていた(日本学生相談学会, 2012)。

#### 5. 理解の深まり

上記のような課題について、自殺防止対策室会議、保健医療人教育室運営会議、学生支援担当者連絡会などでの話し合いを経て、下記の点が確認された。(酒井, 2011b; 2012a; 2012b; 2012c; 2012d; 2013)

##### 5-1. これまで確認された事項

- ・保健管理センター(含: 杉谷支所)は、応急処置・予防接種を行うために診療所登録されているが、それ以外の業務を行わないわけではなく、



- ・その結果、教育・評価と学生支援が未分化。
- ・こうした組織的不備は、管理者教員らの個人的理解により、かろうじて支えられている（図8）（後述）。

## 6-2. 保健管理センター杉谷支所固有の課題

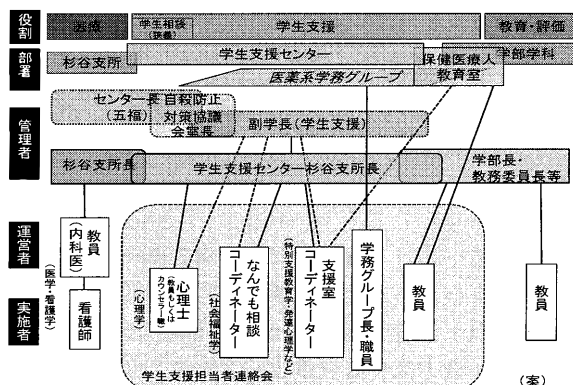
- ・支所長は任期2年で兼任。理解が深まったところ交代となる。
- ・学生支援の文脈で話し合う場が、支所内に無い。
- ・心理相談の運営者教員を欠いている（図6・図8）。
- ・予算執行には学務グループ長の後見を得ている。
- ・学部との情報共有等に課題（図1・図8）。杉谷支所危機管理ワーキンググループは診療所としての杉谷支所を前提としているため、要件が厳格でほとんど適用できない。
- ・支所内外の理解と協力を得ながら支えられてきている（図5・図8）。

## 7. 考察と展望

上記のような組織的不備は、医薬系学部学科の学部長・学科長・教務委員長らの管理者教員、学生支援担当副学長、自殺防止対策室長、保健管理センター長（五福キャンパス）、保健管理センター杉谷支所長、医薬系学務グループ長らの個人的理解によって、かろうじて支えられている（図8）。しかしこれらの管理者の多くは、まもなく異動や任期満了、定年退職を迎える。したがって、学生支援体制の整備が、杉谷キャンパスにおける喫緊の課題である。

とりわけ、保健管理センター杉谷支所臨床心理士は、学生支援センター等の支援部署に配置すべきである（日本学生相談学会、2012）。なお、一橋大、三重大、山形大などの旧国立大学で、こうした再編成の動きがみられる。図9のように支援職種は単一部署に配置すべきである。

図9



## 8. 結論

杉谷キャンパスの学生支援体制には不備があり、大学としての安全配慮義務の履行や、学生の修学環境保全に、支障をきたしている。支援職種は単一部署に配置すべきである。（日本学生相談学会、2012）

## 謝辞

平素より学生相談、学生支援に深いご理解とご協力、ご指導をいただいている、村口篤先生（富山大学医学部長）、今中常雄先生（富山大学薬学部長）、服部裕一先生（富山大学医学部医学科長・同教務委員長）、竹内登美子先生（富山大学医学部看護学科長）、長谷川ともみ先生（富山大学医学部看護学科教務委員長）、新田淳美先生（富山大学薬学部教務委員長）、名執基樹先生（富山大学杉谷キャンパス教養教育教務委員長）にお礼申し上げます。

また、西川友之先生（富山大学人間発達科学部教授・自殺防止対策室副室長）、齋藤清二先生（富山大学保健管理センター長・教授・自殺防止対策室副室長）、角田雅彦先生（石川県こころの健康センター所長・前富山大学医学部講師・自殺防止対策室室員）ならびに富山大学自殺防止対策室会議の皆様にお礼申し上げます。富山大学の教職員の皆様にお礼申し上げます。

また、多くのご指導、ご助言をいただいた、関東地区学生相談研究会、医療系学生相談メーリン

グリスト、学生相談青葉会、全国カルト対策大学ネットワーク、成穂会の皆様にお礼申し上げます。

なお、本研究の一部は、平成20年度日本学生相談学会学会推進研究による助成を受けています。この場を借りてお礼申し上げます。

## 文献

- 神谷栄治 2011 大学教員からみたキャンパスメンタルヘルスー大学改革の流れの中での学生と教職員ー。全国大学保健管理協会第49回東海北陸・地方部会研究集会パネルディスカッション資料。
- 松本俊彦 2012 自殺予防のために私たちにできること。富山大学特別講演会資料。富山。
- 日本学生相談学会 2012 学生相談機関ガイドライン草案。
- 酒井 渉 2009 他職種との連携についてー臨床心理士としての立場からー。研究会シンポジウム「発達障害傾向のある学生への対応を学ぶー保健管理担当職としての立場からー」シンポジスト。平成21年度全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会報告書。富山。
- 酒井 渉 2011a 医薬系学科において修学継続を望む発達障害学生。平成22年度学生の心の悩みに関する教職員研修会・第44回学生相談研究会議報告書。23-24。東京。
- 酒井 渉 2011b 杉谷キャンパスにおける学生支援・自殺防止対策の現状と課題。平成23年度第7回自殺防止対策室会議資料(非公開)。富山。
- 酒井 渉 2012a 杉谷キャンパスにおける心理相談の実施方針と今後の課題。平成23年度第10回自殺防止対策室会議資料(非公開)。富山。
- 酒井 渉 2012b 地方大学におけるカルト対策ー学生相談体制との関連からー。日本学生相談学会第30回大会発表論文集。84。札幌。
- 酒井 渉 2012c 杉谷キャンパスにおける学生支援・学生相談・自殺防止対策の現状報告。平成24年度第6回自殺防止対策室会議資料(非公開)。富山。
- 酒井 渉 2012d ハイリスク学生について。平成24年度第7回自殺防止対策室会議資料(非公開)。富山。
- 酒井 渉 2013 杉谷キャンパスにおける自殺防止対策・学生支援の現状と課題。平成24年度第10回富山大学保健医療人教育室運営会議資料(非公開)。富山。
- 酒井 渉・松井祥子・四間丁千枝 2011 University Personality Inventory短縮版作成の試みー項目反応理論を用いたGeneral Health Questionnaire-30との比較からー。学生相談研究32(2)。120-130。(日本学生相談学会平成20年度学会推進研究報告論文)
- 酒井 渉・立瀬剛志・吉永崇史・水野 薫・原澤さゆみ・富山大学医薬系学務グループ・松井祥子・佐野隆子・高倉一恵・島木貴久子・舟田 久 2012 医薬系キャンパスにおける学生支援の現状と対応についてー相談内容別分類からー。富山大学保健管理センター紀要「学園の臨床研究」第11号。31-37。
- 酒井 渉・水野 薫・原澤さゆみ・立瀬剛志・吉永崇史・富山大学医薬系学務グループ・松井祥子・高倉一恵・四間丁千枝・島木貴久子・島田尚佳・佐野隆子・北島 勲 2012 修学サポートグループの有効性についての検討ー学生支援モデルとの関連からー。Campus Health 49(4)。97。神戸。
- 齋藤清二 2011 Personal Communications。平成23年度第6回富山大学自殺防止対策室会議。
- 佐藤尚代 2011 学部特性から考える学生相談活動の工夫ー医療系学部の場合ー。日本学生相談学会第29回大会発表論文集。75。東京。
- 鈴木健一 2006 「金沢大学生」心の悩みー学生相談の事例からー。金沢大学文学部FD研究会「学生の心・学生の選択」。金沢。
- 吉永崇史・西村優紀美 2010 チーム支援を通じた合理的配慮の探究。齋藤清二・西村優紀美・吉永崇史(編) 発達障害大学生支援への挑戦ーナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメントー。金剛出版。109-139。東京。